今昔物語 第69話

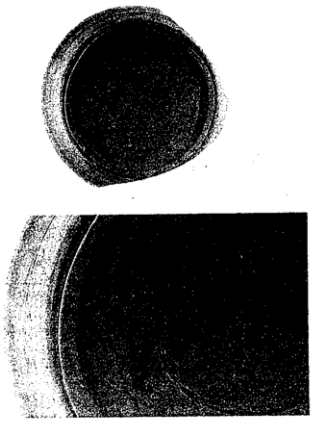
考古資料精選⑪
『白麻呂』銘 墨書土器

写真の資料は奈良時代（約1200年前）に使われていた杯と呼ばれる須恵器で、底部の外面に「白麻呂」と書かれています。寺川遺跡から平成元年に出土したもので、「白麻呂」と書かれた土器が3点確認されています。

墨書土器とは土師器や須恵器などの土器に墨によって文字や記号が書かれたものを言い、内容としては地名や施設名、職名・人名などが多く、主に都城跡、官衙（役所）跡、寺院跡などで多く出土することがこれまでの調査で判明しています。

このように墨書土器の出土は、特別な集落の存在を示すものであり、この地域には官衙的施設があったものと思われます。また、土器に人名を書くことは、特別にその土器の所有者を示すものなので、おそらく「白麻呂」と呼ばれる人物は一定の身分を持った役人であったのでしょう。

当時、この地域一帯を治めていた官衙的施設のなかで「白麻呂」という人物がいかなる役職につき、どのような仕事をしていたのか皆目分かりませんが、この文字を見ながら「白麻呂」の仕事や生活ぶりに思いをはせると、その歴史はどのようなものであったのか興味の尽きないところです。

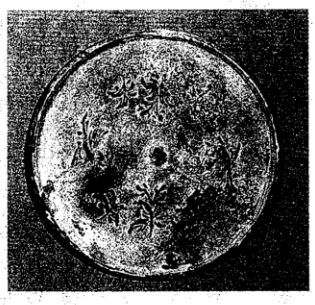


今昔物語 第70話

考古資料精選⑫
和鏡

北新町遺跡から平成5年に出土した銅製の鏡で、直径8.9㌢、厚さ0.1㌢、重さ63㌘あります。平安時代後期（12世紀）以降は国風文化の影響のもと、鏡においても日本独自の様式をもつ和風のものが製作されるようになり、そのような鏡を中国鏡と区別して和鏡と呼んでいますが、この鏡は背面の文様が草花と鳥であることから特に「花枝双鳥文鏡」と呼ばれています。また、縁の形態や文様の対照的な配置などは和鏡でも古い様相を示すものであり、12世紀前半頃に製作されたものと考えられています。

和鏡の用途としては、身分の高い人々の粧鏡（化粧用の鏡）としても使われていたと思いますが、大半は経塚（経典を地中に納めて塚にしたもの）への埋納、墓への副葬品、山岳信仰に伴う水中への奉納、建物に伴う地鎮など、さまざまな儀礼・祭祀に使用される道具であることが明らかにされています。

この和鏡についても当時の集落跡から東に約80㍍離れた地点で、直径25㌢、深さ15㌢の小さな穴に埋納されていたものであり、おそらく何らかの儀礼・祭祀に使用されていたものと考えられています。

和風文化が定着、発展していく社会状況下において、当時の人々の美的感覚はもちろんのこと、その背後にいただく思想・信仰をもうかがえる貴重な資料であると言えます。